

沖田源蔵は下り普通電車の三両目に居た。停車を待つて線路の片側にしかホームがないこの駅に降り立つと、いつも通り降車したお客の数をそれとなく数えてみる。五人だった。電車も降りた客も見えなくなつてから改札に向けて歩き出した。細かな雨粒が舞うようにして降っている。見上げると陽光を浴びた真っ白な雲があり小さな青空さえ覗いている。その近くを薄墨色の雨雲が猛スピードで走っていた。視線を下ろすと単線の軌道は濡れ光つて真っ直ぐに前方の緑の中に向かっていている。特急通過の待避駅なので駅付近だけが複線になっているのだが、それが単線に戻る箇所は曲線部分がとりわけ美しい。一つになる手前に踏切があるのも何やら示唆に富む。

切符を受け取るために若い女性駅員が駅舎の前に立っている。一人だけ遅れてしまったことを詫びて切符を手渡した。この年になると、若いというだけで女性が綺麗に見える。いや、今回のこの人は年配になつても気品がありそうだ。そんなことを思いながら、子ども部屋のように狭くて可愛い駅舎を通過して外に出た。

「ジイジ、傘持ってきたよ」と女の子の声に振り向くと、赤電話と自動販売機の間には孫のなぎさの笑顔があった。

「この電車って良く分つたなあ」

「広告チラシみたいな時刻表に丸印がついてたから」

そうだった。一時間に一、二本しか停車する電車がいないので、行き帰りの時刻はほとんど無意識に印を付ける。

「それにさっきまでどしゃぶりだったんだ」

なぎさがそういったとたんに雨脚が急に強くなった。

「少しここで止むのを待ってしよう」

なぎさが手にしていたのは、大人用の黒い傘一本だった。

横浜に居る娘の波留美が突然なぎさを連れて富戸の沖田の家に転がり込んだのが一週間前のこと、それからずっと好天続きだったので、女物の傘まで気が回らなかつたのだ。家までは踏切を渡り坂道を上がつて数百メートルほど歩く必要がある。

「ジイジだけ傘をさせば、わたしはいいから」と、持っていた傘を押し付けてきた。

「濡れちゃうから待とう」

するとなぎさは雨の中に飛び出し嬉しそうな顔で空を見上げた。

来た時からずっと不思議な子だとは思っていたが、これには驚いた。「好きなんだ、雨」と穏やかな声で聞いてみた。

「うん。それにかっこいいじゃん、ぬれながら歩くの」

雨脚も少しやわらいだので孫に従つた。なぎさを引き寄せて相合傘風に歩こうとしても、すぐに飛び出してクルクル回りながら楽しそうに歩いている。昔のアメリカ映画「雨に唄えば」を思い出して笑つた。十代の終わりごろにテレビで視て感動したミュージカルだ。もつとも雨の中で踊つたのは男だった。

可愛いものだなと、しみじみと思つた。じつは、この孫に今回初めて会つたのだ。十九になった波留美が連れてきた山岡徹という男が気に入らず、二人の結婚に反対し続けた結果、娘との間には大きな亀裂ができて初孫を見る機会すら失つた。もちろん結婚式も、妻の海の参列は許したが自分は欠席している。

「帰つたらすぐシャワーで温まるんだぞ、風邪ひくから」

「うん。でも一緒はだめだよ」

これには嘖き出した。

「はいはい、もうレディだからな」

「波留美の方がおっぱい大きくていいよー」

確かに三十六歳になってやっとできた一粒種の波留美とは、小学生時代かなりの頻度で一緒に入浴していた。標準より小柄だった子が伸長期を迎えたのは中学に入ってからで、高校を出るころには父親の身長を超えていた。さらにそのまま精神的にも背伸びをして嫁になって出て行った。

それにしても無邪気に母親の乳房の方が大きいからと言われたのには参った。「時代だな」と苦笑いをするしかない。

「なぎさは八つだったな」

「うん、でももうちょっとで九歳だよ」

やはり波留美は結婚してすぐに妊娠したことになる。

沖田は、笑いながら口を開けては雨粒を受けているなぎさに、小学生の頃の波留美を重ねて見ていた。

沖田の家は坂のつっぺんにある。敷地はやや傾斜があり、建物は木造平屋建で大きくはないが、周囲は縁に囲まれていて癒される環境にあった。ただ、残念なことに相模の海は見えない。

家に戻るとなぎさは、中廊下を走って突き当りの自分の部屋に入った。午後一時半になるのに、まだ昼飯も食べていないという。

なぎさの昼飯はうっかり忘れていた。炊飯器を開けると朝二合炊いた飯が大分残っている。波留美が朝食をほとんどとらないからだ。レトルトカレーがあったことを思い出し、キッチンの卓上に、大皿とともに並べた。

「シャワーするからね」と、濡れた衣類を抱えたなぎさが上半身を覗かせて言った。

「ああ、湯沸かし器の温度を四十一にして温まるように体にかけて続けるんだよ。お昼はカレーだから、着替えたらおいで」

「うん、ジイジ、割烹着はキッチンの壁に掛かっているよ」

「あははっ、そこまではやらん」と片目を瞑った。

割烹着は隣人のものだ。よくもまあ短期間にいろいろ記憶したものだとし驚いた。昨日は昨日でシンク横の引き出しに下ろし金があると教えてくれた。誰の血を引いたものか。この数日間の言動を見る限りおよそそつが無い。それでいて子どもらしくお茶目なのだ。

「海の血かな」と数年前に乳癌で亡くした老妻のことを想った。

「ゲンさん居るかい」の声と玄関のドアが開く音が同時だった。

「おう、上がりな」と顔も確かめずに声の主を呼び込んだ。

自分と同じく地縁の無い相手が欲しかったのかもしれないが、隣家に一人住む涌井香枝は、沖田夫婦が引越しの挨拶をしに行った翌日から早々と接近をして来た。北関東から十年前に移って来たという。右も左もわからなかった時期、この隣人のお陰でどれだけ助かったことか。親戚同然の行き来は、妻の海が亡くなってからも続いている。

「煮物作りすぎちゃってさ。娘さん親子もまだ居るんでしょ、温めて食べてくれる、自前の野菜ばっかりだけど」

「助かるよ、あんたに勧められて爺さんの手料理奮闘中だけど、なかなかあ、まだ品数は両手の指の数にも及ばない」

「筋はいいよ、それに認知症予防にもいいんだよ、料理は」

「そうだってねえ、ちょっと調べた」  
先ず何を作るかメニューを考える。次に揃える食材、調味料を頭に浮かべて買い物。さらに調理法、手順、そして盛り付け。すべてに頭を使う。各段階で選択することは決断することと同義だ。脳の働きに悪影響はない。

「ふふっ、何でも自分で調べるんだね、元学校の先生だからかねえ」

「それ、内緒だ、暮らしくくなる」

「周りに尊敬されるんじゃないか？」

「クレーマー扱いされるんだ、店で何か質問するたびに」

「あー、職場の学校と住まいが近かったらそうかも。でもゲンさんの場合は顔だね」

「なんだ？ それ」

「かなり難しそうな顔してるから」

「なるほど」

「そこで納得するかね、怒るでしょ、ふっう」

二人して笑った。

「お昼、できたあ？」となぎさが中廊下から顔を出した。

「初めてだったっけな」と沖田は頭に掌を載せた。

「正式には」と香枝がうなずく。

「なぎさ、お隣の涌井香枝さん、顔は怖そうだけど優しい人だよ」

「ちょっと、ここで仇とるかねえ」

「山岡なぎさです。ジイジがいつもお世話になっています。よろしくお願いします」となぎさはペコリと頭を下げた。

「まあ、なんて立派なご挨拶。涌井です、こちらこそよろしくお願いしますね。夏休みが終わったらこの学校に移るの？」

「それはまだ…母に聞いてくださいますか」

会話が数秒間止まった。

三者三様の微笑がその場の雰囲気を和らげてはいる。

「あ、ごめん、おばさん行くからご飯にして」

香枝がなぎさにうなずいてキッチンを出た。

「すぐにチンして温めるから」と沖田がやっとなぎさに応じた。

なぎさはコップを二つ手にして蛇口のあるシンクに向かう。

「ゲンさん、明日十時だよ、稲取に見に行くの。帰りに伊豆高原駅前の石も見るからね、いい？」

玄関で大きな声を出す香枝。

「わかつてるよ、支度しとく」

「貸した築城石の本、読んだわよね」

「ああ、完読した」

「さすが読書家。じゃあね！」

ほとんど間を置かずにドアが閉じる音がした。

「顔見ないでどんだん話すんだね、びっくり」となぎさが首をすくめた。

「まったく賑やかな人だ」

「もしかしてジイジのカノジョ？」

「ばか言いなさい。失礼だよ、涌井さんに」

「あ、チン鳴った、もう一皿だね」となぎさが微笑む。

油断できない孫だと、背中に冷汗が滲み出るのを感じた。

都会とは不便なところで友人にちょっと相談しようと思っただけで場所に困る。昼なら喫茶店という手もあるが、お互い仕事を持つ身だ。しかも二人とも残業した後でもなれば早くても午後九時になる。となると酒がつきもの、相も変わらぬ山岡徹は居酒屋『むこ殿』に居た。店主に言わせると屋号の中の『むこ』は花婿のそれではなく、罪がない人という意味の無事なのだそう。その解釈だけでいまの山岡は救われる。

「よりによって総務課のあの子とかよ。むしろ交通事故だな」と夏川は言った。

この男は勤務している支店こそ違いが同期の入社だ。しかも同じ女性でつまずいた過去がある。だからこそその相談相手なのだが。

「で、後を引かない女なのか」山岡の憂いはこれに尽きる。

「ああ、次から次だから相手は、結婚を迫るとか慰謝料よこせとか、ストーカーに発展するとか、そういうタイプじゃないよ、安心しろ。だから間違っても家庭を壊すなよ、一回だけなんだろうお前も」

「そうだけど…」

「もしかしてお前、はるみちゃんに言っちゃった？」

唇を噛んでうなずき、ビール瓶を手にして夏川に勧める。

「それで、子どもを連れて伊豆のお義父さんの処へさあ」

「行っちゃった…か」

「知っての通り頑固一徹、俺との結婚に大反対したあの人だぜ」

「たしか式にも来なかったとか言ってたな、手ごわそう」

「何かない？ 解決の糸口」

「いまどき切腹はないし、仕事上頭を丸めるわけにもいかないし、とにかく伊豆へ行って土下座しかないな」

「それで済むかな」

「さあな、しゃべっちゃまったお前がバカなのさ。他にどんな手があるって言うんだ？ あったら参考までに聞かせてくれよ」

自分でもバカだと思い、ビールをあおってコップを空にした。

夏川は、言い過ぎたと思ったのか、「まあ、今夜は飲めや、付き合っただけよ」と注いでくれた。

「波留美がなぎさに浮気のことしゃべっていると思うとなあ」

自虐的にまた一気に飲み干した。

「そういう人なのか、はるみちゃんて」

「波留美に言われなくても感づいていると思う。賢い子だからな、何というのか、限りなく大人に近い子ども？」

「父親に似なくて良かったな」

「たしかに」

「たしかにじゃねえよ、ここは怒るところだ。お前、仕事以外はからつきし駄目だな。いいか、それでなくとも八歳から十二歳までの子どもはゴールデンエイジだ、大人になる準備も九割方整っているんだと。感性は鋭い、記憶力も抜群。その上さらにお前の子がより優れているときたら一体どれだけ凄いんだ。その

子も大人と同じだと思って事態を收拾することを俺としては勧めるよ。逆に言えばそれぐらいしかアドバイスできない」

山岡は唇を噛み、すっと右手を前に出した。

「何だ、その手は」

「分かった、ありがとう」

「お、おう」と夏川も握手に応じてくれた。

「やっぱり女につまづいた経験者の助言は違うな」

「それを言うか普通」

「腹をくくったら伊豆へ飛んで行く」

「悪いことは言わない、そうしろ。先延ばししてもいいことはない」

「そろそろツマミ出してもいいかな」

気が付くと板前でもある店主が笑顔で傍に立っていた。

沖田宅への坂道は車一台がやっと通れる程度の道幅しかない。戸建て購入に際して沖田が車を中古車屋に売り、国産のバイクを買った所以だ。そのバイクもいまは、来てすぐに夏バイトで働いだした波留美が通勤に使っている。

ということでのこの日の築城石の実物を見るプランでは、隣人の軽自動車に乗って行くことになっていた。いい年をしてなぜ石なのか。波留美となぎさが来る前のこと、香枝と一緒に駅まで坂を下って行ったのだが、途中で沖田は常日頃不思議に思っていたことを香枝に訊いた。この辺りの家で擁壁に使われている天然の黒い石があまりにも重厚な趣でしっかりとしている。この石は何とのかと。

「正式には名前知らないけど、築城石と同じものだよ、わたしもここに来たとき地元の人に聞いたんだけど。わたしね、そのひとに誘われて研究サークルに入ったの」

会合は好きだが難しい議論は苦手だと香枝は付け加えた。

「ほう、築城石でもっと特殊な場所で採れて、一般的には使われてないと思ってたんだけど、地元の人宅地造成にまでねえ」

かつて皇居の濠の向こうに見た城壁、城造りに用いた頑丈な石がこんなところにも使われている。沖田はもっと詳しく調べてみたいと、かなり強い興味を持ったのを憶えている。

還暦とは思えないハンドルさばぎで、運転席の香枝は何となく男っぽい。性格もカラッとしていて都会暮らしでは会ったことがないタイプの女性だった。ただ、四つ葉の高齢運転者票だけは車の前後にしっかりと着けている。実年齢より自分が若いと思うなら避けるマークだ。この落差が沖田には面白かった。

「そうだ、なぎさちゃんのお昼ご飯とか大丈夫なの？」

「あ、迎えに来てくれた時はまだ起きてなかったから分らないよね、娘は今日休みだ」

「そうだよね、ゲンさんが孫のこと忘れたりしないよね、ごめん」

「いや」昨日は見事に忘れて外出をしてしまった。ちょうど伊東温泉に来ていた学生時代の友人と会う約束をしていた。彼が弁護士だったこともあって誘いにすぐ応じた。娘の離婚について大雑把な知識だけでも思ったのだ。

沖田は「いや」までで言葉を止めた。せっかく褒めてもらったのに打ち消してはもったいないと。

「わたしは山の中に転がってる自然な築城石を写真に撮りたいんだけど、駐車場に困ったり、足腰に自信がなかったりで、伊東や東伊豆町に展示されてる石で我慢してるのよ。ちょっと勉強するのが遅かったって感じかな」

「それを言ったら、こっちはどうなる？ 香枝さんより五つも上だ」

「だからこうしてアベックで車なのよ」

「アベックは古いな」

二人の笑いがシンクロした。

沖田は電車と徒歩の組み合わせならどうだろうかと考えた。香枝に借りた本を読んだ限りでは、近場だけでも宇佐美、伊東、富戸、伊豆大川、伊豆北川、伊豆稻取の各駅から石丁場群に行けるはずなのだ。もっとも現在私有地になっているところと一般人は入れまい。さらに言えば、香枝の言う通り山野を動き回る体力があるかどうかという問題もある。不整脈と糖尿病の薬を処方されている身でもあるのだ。

香枝が「弁当箱」と言い表した四角い軽自動車の調子は上々で、

すでに伊豆高原を過ぎて伊豆北川へと近づいていた。

「そうそう、ゲンさんが教えてたのは社会科だっけ、中学の」

「国語だけど、それがどうしたの」

「あー…ずっと気になっていたことがあってね」

「だから何」と少し焦れた。

「築城石の石丁場ってあるでしょ」

「うん、借りた本で読んで知ってる」

「その丁という字の意味とか、何で石切り場って言わないのかって、ずっと首を傾げてたのよ」

「なるほど、これは目から鱗かも。香枝さん鋭い」

「おだてたって木には登らないよー、わたし昔落っこちたことあってさ、栗の木だったけど」

「痛そうだな、その話は」と笑った。会話の筋から外れていて痛い。ただ、笑いの意味は香枝に届かなかった。

「国語的というか、漢字的にというか、それなら語れるけど、それでいいの？」

「うん、何となく謎に迫れば」

「じゃ、一般会話のレベルでね。丁という漢字の持っている意味、つまり語意から言うと石丁は、石の丈夫が一つ、石の街、さらに石が盛んということにもなる。丁々と二つ並べると、続けて石を打つ響きになるかな」

「へえ、何だか全部合わせると石切り場の雰囲気出る」

「最初の語意の例で言うと庭師のことを園丁って言うでしょ。本来の意味内容は専門家に聞いて」

「本来はこの際どうでもいいや、ゲンさんのでいい、面白い」

沖田はここでフツと思った。歴史的な用語なのだろうが、耳にただけでは何のことか分かりにくい。現代の観光資源という面で考えるとどうだろう。石丁場という名称を残すのは当然として、親しみのある別の呼称を付けるわけにはいかないのだろうか。

「波留美、目がとけちゃうよ」

玄関に近い波留美用の六畳間に入るとなぎさは、そう言って寝ている波留美の布団を勢いよく剥ぎ取った。

「もう十一時だよ、お昼ご飯だつてば！」

「自分で何か作つてよ、眠くてダメ」

「もう作つたの、オムライス！」

この一言で跳ね起きた。「うそ。いつ習つたの、そんなの」

「ジイジだよ、間違っても波留美じゃない」

「男子厨房に入らずの人だったはず…」

「何それ」

「源爺の、あ、ジイジの昔からの方針。男は台所なんかでウロウロするなっていうキマリみたいなもの」「毎日キッチンに入るし、料理してるよ、彼は。それより起きなよ、しまらないなあ、ほらブラ着けてスカートはいて」と、次々とほとんど裸の波留美に衣類をぶつける。

「ちよつとあんた、わたしのママかよ」と目を瞬いた。

「まったく、私の分まで冷めちゃうじゃん」

なぎさが出て行ったあとで、改めて庭側の障子を見た。まばゆいほどの白だった。

「ほんとだ、カンカン照り…」

障子の棧は起き抜けの目のせいにか真っ黒に見えた。

波留美はキッチンテーブルの向かい側でオムライスを頬張っている我が子を、しばらくの間ジッと見ていた。

「なに？ お水いるの」と視線に気づいてなぎさが言った。

「あんたさあ、ずっとここで暮らすことになっても平気？」

きちんと娘の気持ちを確かめる時機だと思った。転校するなら夏休みが終わる前に手続きをしたほうがいいからだ。

「離婚するの？ パパと」

子どもの質問は核心を突くことが多い。

「なぎさしだいかな」

「それ、ズルイから、わたしの問題じゃないもん。早く食べて、料理した人って相手の反応が気になるんだって。わたしも同じ」

「うん」と一口分をすくって食べた。「うそ、おいしいじゃん」

「何それ」と言いながらも嬉しかった。

じつは波留美も空腹だったのだ。急にガツガツとオムライスを食べ始めた。

「わたしと離れるの、イヤでしょ、波留美は。だからいいよ、おとなになるまで一緒に居てあげる、心配だし」

これが子どもの台詞かと、軽くため息をついた。

「転校したりすると、もしかしたらクラスになじめないかもしれないじゃん、平気なの」

「どこへ行っても誰がいても負けないからだいじょうぶ。だいいち大都会じゃないからいないって、変な子も」

そういえば普通の三年生よりも体格はいい。むしろ妙に大人びた娘の言動の方が心配になった。周りから浮いてしまうかもと。

「そういえばあんた柔道やっていたっけね」

「話だけ、あしの形が悪くなるって、波留美が反対したじゃん」

「そりゃ反対するわよ、わたしはなぎさのステージママになるのが夢なんだから。脚はすらりと真っ直ぐにじゃなくちゃ」

「かつてに夢見るな。こんなメチャな女の子じゃムリです」

「そんなことないわよ、サツとおしとやかになるの、得意じゃん」

「まあ、すぐ変われるけど」と舌を出した。「それより、ジイジに言ったの？ 言ってないでしょ」

「鋭いわね、何度も言おうとしたんだけどさあ。まだだから夏休みで遊びに来て、そう思ってるかも」  
「あそびに来た人が何で毎日くたびれるほどはたらいてるの。とっくにバレてるよ。やさしいね、ジイジは」

「お水くれる」  
「大人なんだから自分でやって」

「はぁーい」と親子逆転の雰囲気に乗って立ち上がったものの、心底途方に暮れていた。夫と離婚についてきちんと話し合うのが先か、伊豆の親元で暮らす承諾を得てから夫と対峙すべきか。どちらと話し合うのも精神的に苦痛でしかなかった。

「あ、そうだ、煮物あるけど食べる？」

「あんまり料理上手にならないでね、落ち込むから」

「違うって、お隣のおばさんの差し入れ。朝チンして食べてみたけどおいしかった」

「へーえ、源爺もやるじゃん、もてちゃって」

「おばあちゃんだよ、それにカノジョじゃないってさ」

「え？ あんたそんなことまで聞いたの」

「だって気になるでしょ」

「うん、言ってる。危ないところだわ、もし色恋だったらこんどの件、源爺がパパの味方になりそう」

「どういうこと？」

「まだ、子どもには早い」

「こんなときばかり」と唇を尖らせた。

「その煮物さ、今夜のおかずの中に入れよう」

波留美はそう言うと、蛇口をひねってからコップを探し出した。かなりの天然ぶりだ。

稲取駅前の築城石の展示と東伊豆町役場前の十四トンの築城石を見た後で、沖田と香枝は稲取港に面した磯料理屋に入った。

沖田は徳川家康が江戸城拡張工事のために城壁に必要な石の調達を複数の大名に命じたというような歴史そのものへの興味は薄かった。ピラミッドにせよ、城郭にせよ、巨大な権力が下々の犠牲のもとに我が儘を通した結果だと捉えるからだ。それでも資料にあった石の写真を見ただけでは感じなかった興奮が自分の中に生まれた。それは不思議さが内に溜まったからと言えるかもしれない。

各種資料によれば、築城石に使われた石は、安山岩とか玄武岩とか恐ろしく硬くて重いものだ。例えばそれが崖を形成していたとしても、地表に平らに露出していたとしても、動力ドリルもダイナマイトも強力電動カッターも、さらには硬度最高のダイヤモンドの刃も無く、クレーンもブルドーザーも無い、西暦千六百年初頭という時代にどうやって切り出したというのだろうか。特に最初の一枚の切り出しの困難さを想像するとめまいがしてくる。切り出した石を仕上げるのも至難の業だ。どれだけ多くの石工が働いたのか。またその作業場所はどこか。石を傾斜に従って海岸まで運ぶ苦勞はどうだ。石を曳き下ろしていく道はどう造り、勾配はどれほどだったのか。小型の栗石は複数個をまとめ数人で担ぎ運んだと仮定して、その労働の過酷さと思う。場所によっては転がる丸い木つまりコロの上に載せて百人単位の間人が力と知恵を出し合っただけの作業だったのだろうか。修羅曳きという名前からして恐ろしい。そうやって海岸に出るところが出来たとして、その巨大な石を不安定で揺れる石船という名の木造船にどうやって積み込んだのか。さらに今からみれば極小さな石船での伊豆から江戸への航海はどうだ。櫓権か帆掛けでは海難事故がどれだけ多かったろうと胸が痛む。もちろん江戸で陸地に下ろすときも、築城現場で積み上げるときも「どう

やって」と考え込んでしまう。資料をつぶさに読んでも納得できなかった。そしてそれらのことは沖田にとっては妄想さえ浮かぶ壮大なロマンでもあった。

「お酒飲む？」という香枝の声に沖田はハッと我に返った。

「ごめん、ちょっと考え込んでちゃってね。酒はいいよ、もうすぐ料理が来るし。ありがとう」  
「娘さんのこと？」

「いや、見てきたばかりの石のことさ」と苦笑いをした。

「嘘でしょ、わたしなんかでっかいわぁで終わりよ」

「来たよ、料理」

膳が整うまでの数分間が長く感じられた。特別な理由はない、空腹だったのだ。決して一緒に夕食に胸がときめいたのではない。

「背は高いけど可愛いって感じね、朝に何回か見かけたけど最初ヘルメット姿を見て高校生かと思ったくらい。それがあのなぎさちゃんのママでしょ、驚いたわぁ」

「童顔で中身も女子高生並みだけだね、会社の仕事はきっちりやるらしいけど。ちょっと甘やかしすぎたかな」

「蝶よ、花よと育てたんでしょ、分るわ、さぞかし花婿が憎らしかったでしょうね」

「嫌なところをズバッと突くね」と首をすくめた。

「で、ずっとこっちで暮らすの？ あ、差し支えなかったら」

「それがね、まだ何も言ってこない」

「かわいそうに、水向けてやったら、言いにくいだよ、きつと」

「お見通しだね、香枝さんは」

「似たような経験したから、若いとき」

香枝が自分のだし卵を箸でつまんで沖田の器に運んだ。

「わたし、苦手なの、玉子」

「もらうけど、珍しいね、卵嫌って」

「子どもいないから…玉のような子をだすって出産だから」

いつだったか、現在の涌井宅を相続する者がいないと聞いたことがある。孤独死について語ったこともある。駄洒落に近い理由付けだが笑うに笑えない。

「よく心配するのが親の仕事だって言うけど、子どもがいなくちゃ孫もいないわけで全然仕事にならないの。寂しいものよ」

「分ったよ、香枝さんが何を言いたいか」

「ありがとう、ぜひそうしてやって」

沖田はガサツに見える香枝が実は繊細な人なのだと、このとき初めて知った。

夕食後、沖田が自室で築城石に関する本を再読していると戸襖をノックする音がした。

「波留美か？ 入んなさい」

スーッと開けて顔を出したのはなぎさだった。

「どうした？ いいよ、勉強してるわけじゃない」

戸襖をそっと閉めてから「ジイジに聞きたいことがあって」となぎさは、沖田が文机代わりに使っている木目調の比較的大きなお膳の向こう側に座った。

沖田は少し身構えた。親の離婚騒動に絡んだ質問だと答えようがないからだ。波留美と話し合うのが遅

すぎたことを悔いた。

「ここに来る前にね、横浜の学校で五年生から問題出されたの」

「年上の友だちか、うん、それで」少しホッとした。

「わたし、答えがわからないって言ったの。それが合ってるかどうか、ずっと気になって」

なぎさによると出された問題はこうだった。長さ百メートルの道がある。ここに六本の木を植えた。木と木の間隔は何メートルか。

よく出題される植木算の類だが、沖田はなぎさを試したくなった。

「なぎさはなぜ解らないと決めつけたのかな」

「木と木の間についてのルールが無いもん、百割る五じゃ答えが出ない」

簡にして要を得た的確な指摘だった。道は直線なので木の間隔の数は、植えた木の数引く一で五と答えがすぐに出る。しかし「等間隔に植えたとして」との条件が無い限り木々の間隔の長さはそれぞれバラバラでよいことになる。食い違う間隔の組み合わせは気が遠くなるほどの数になって答えを出すことは不可能だ。

「よく気付いたね、その通りなんだけど、質問した子にわからないと答えるよね、なぎさが問題を理解できないんだと勘違いされそうだな、どうだろう？」

「あ、答えは出ないって言えばよかったんだ」

「うん、そう言ってあげないとね。そういえば答えが出ない、出るよと話が算数以上に広がっていくしね」

「やっぱり国語の先生だ」

「それ誰に聞いた？」

「波留美から」と笑顔になって、「さっき聞いたばかり」と言った。

祖母にあたる沖田海が数学の教師だったことも知ったようだ。

これには沖田も笑った。最初は隣室に聞きに行ったに違いないが、残念ながら波留美は数学音痴だったのだ。いま隣の部屋で耳を澄まして聞いているに違いない。

「植木算というけど、木を人間にして想像すると面白いんだ」と、沖田は思いつきだが話したくなった。なぎさ一人で道に立っていると間がどこにもないので人なんだ。誰かが隣に来ると、人と人の間ができてなぎさも人間になる。長い間生きていくと遠い人近い人たくさん出てくるんだけど、その人との間を考える時だけは自分という一人を引いてみることだ。わがままが人間社会という間で歓迎されないのは、もしかしたらこのためかもしれないね、植木算は奥が深い」

気持ちよくこじつけたのに、ここでまさか突っ込みが入るとは…。

「ジイジ、池みたいいな真ん丸などころの植木算だと答えを出すのに一つ引かないよ、だから一人で立ってたわたしは消えない」

「そうきたか。丸の場合、最初のなぎさが最後のなぎさと重なるから、一つ引いても人の数と間隔の数が同じなんだよ、きつと」

かなり苦しかった。

「いまのだけ、答えが出ないじゃなくて、意味わからない」

二人して笑った。即座に取り繕いが破綻している。

それでも楽しいひとときだった。独り暮らしが数年続いている。ひとしおなのはそのせいだと思った。なぎさが洋間に帰ってしばらくすると、ノックも無くスーツと戸襖が開いて一升瓶を窮屈な格好で抱え、コップ二つを指で支え持った波留美が入って来た。

「いい機会だな、飲もう」と沖田は微笑んだ。

「笑い声だけ聞こえた」

「こっちへなぎさを送ってくれてありがとう」

「ちょっとズルしちゃった。源爺が優しくしようになったときを狙って来た。あ、お爛したほうがいい？」

「冷でいいだろ、体調も気分もいい」

「ツمامイがないわ、何にも」

「お前との話が一番の酒の肴、それだけでいい」

「なんか怖いな」

沖田は香枝の言葉を思い出した。「そうしてやって」という言葉を、水に向けてやれという助言だった。

「まさか別れるわけじゃないんだろ」

一升瓶の酒を片手でコップに注ぐのは波留美には無理だろうと、二つとも自分で注いだ。

「うん、なぎさのためにも」

「それはよせ。母としてではなく大人の女として判断しろ。ほれ、ひさしぶりだな、カンパイ」

波留美が恐る恐るコップを合わせてきた。注ぎ過ぎだったのだ。

「なぎさはもう何が起こっているのか知っているし、あの子なりにいろいろな気を遣ってる。なのに、肝心なお前がグラグラと迷っているだけというのは、何とも情けない」

「すぐ事情を聞いてくれると思ってたの、ここに来ればあ、ぜんぜんかまってくれないんだもの」

「甘ったれるな、自分で決めた結婚なんだぞ」

「やっぱり根に持ってるんだ、いまでも」と、ゴクツと音を立てて酒を嚥下した。

「バカ、俺がいくつだと思ってるんだ、もうこっちは老人だ。穏やかさが何よりも欲しい老いぼれだ」

「山岡が来ても追い返したりしない？」

「当たり前だ、なぎさの父親じゃないか。何ならお前から呼んでやれ。気が小さそうだから今頃頭を抱えているだろ、きつと」

「でも、口惜しくて。理屈では許してるんだけど、感情がどうしても言うこときかないの。ごめん」

波留美の目から落ちた涙が光った。

「分かった、俺が連絡をとってやる。とにかくお互いに顔を見て話し合え」

「うん、でも、来ても殴ったりしないで」

「ぶたれちゃ可哀想だ…か？ なるほど」

「え？ 何…？」

「波留美はまだ、山岡が好きだったことさ。正直になれ」

肩をすぼめてコクリとうなづく波留美。

「でも…もし、話が壊れたらだけど、ずっとここに居ていい？」

「当たり前だ、ここはお前のうちじゃないか。海も死んだ。俺にもしものことがあればここを相続するのはお前だ。相続はまだ先だとしても、和解したら別荘だと思ってる気楽に使えばいい。二人の使ってる部屋はそのままにしておくから」寝具は新しいものを揃え、食器類も増やそうと決めている。

「うれしい。源爺、ううん、お父さん、ありがとう」

「なんだ、いまさらだぞ」

「なぎさ連れてもっと早く遊びに来てればよかったね、ごめんね、十年近くも実家から遠ざかって」

波留美はなぎさの名前を出してワンクッションをおいた。

「ああ、自慢できる孫だ、あの子は。こっちこそ感謝だ。やっぱり海の隔世遺伝かも、お前と並んで座っているとなぎさの方が母親に見える、波留美ちゃん、しつかりするのよって」

「源爺、それはない、ひどいわぁ」

「おい、その源爺っていうのは止めてくれ、俺の名前は源次だ。どうしても爺をつけて呼びたければ、そ  
うだな、最近築城石に凝ってるから石爺で頼む。いまのは呼び捨てられているようで面白くない」

「はい、石爺」と言ってから「ヘンなの」と笑った。

泣き笑いをしている波留美を見て、沖田は助言をくれた香枝に心から感謝をした。

不思議なもので、翌朝沖田が山岡に電話連絡をと思っていた矢先に、山岡の方から波留美に連絡が入っ  
た。ようやく三日間休みがとれたので「いまからそっちへ行く」と言ってきたらしい。

沖田はこれを受けて香枝にすぐ頼みごとをしている。丸二日の滞在ということだろうが、全て外食とは  
いかない。こまごまとは言わずに資金を渡して「頼む」と手を合わせた。

駅からの道順は分かりにくい。沖田は出迎えるつもりでいる波留美を制してなぎさにその役を振った。  
決着がつかないうちに迎えに行つては解決への道筋が狂うという理由だ。

なぎさは、山岡が波留美に告げたという到着時刻に合わせて坂を下った。途中の道の左右には生け垣や  
家庭菜園があり、小さなミカン畑もある。中ほどまで下ると一気に景色が開けて、遠くにはあるが海も  
見える。案外気に入っていた。この地で父親抜きで暮らしてもいいかなと思いはじめていた。

山岡はいつも帰宅時間が遅く、仕事休みは昼頃まで寝ていて、いろいろ話し合ったり遊んでもらったり  
どこかへ連れて行つてもらったりした記憶はほとんどない。一方波留美の方もなぎさが学校に入ると間も  
なく就職をしまい、なぎさは下校すると自分で家の鍵を開けて入る「鍵っ子」になった。それでも六  
歳になるまでの間、傍に居てくれた母親のぬくもりは忘れていない。どちらかを選べと言われれば母親に  
する。なぎさの中でそれは確信に近かった。だいいち母親は頼りなくて危なっかしい。「波留美はひとり  
にしちゃだめだ」が、なぎさの本音でもある。

山岡は午後二時三十分着の電車であつた。

なぎさ一人の出迎えだと分かると少し表情が曇つた。

「パパ、残念でした。でもまだモンダイの答えが出てないんでしょ、しかたないよ。ジイジがね、わたし  
に行けつて」

「問題つて、なぎさは知ってるのか？」

やはり話してしまつたのかと唇を噛んだ。

「べつに何にも聞いてないけど急に伊豆だとか、ジイジだとかヘンじゃん。でもジイジに会えたのは良か  
つたけど」

これもきつい言葉だ。これまで沖田に孫を見せようと努力しなかつたのは自分だからだ。

「怒つてたかい、ジイジは」

「ううん、全然。ずっと笑顔だしやさしいし、波留美だつて元気いっぱいだよ」

ますます気後れが進む。背中に視線を感じて後ろを見ると、女性の駅職員が小首を傾げている。不審が  
っているのかも、なぎさの背を押して近くの観光案内板の前へと移動した。

「ごはん、ちゃんと食べてるか」

「うん、三人が交代で作つたりして」

「三人？ なぎさも料理するのか」

「ジイジに五つ習つた。ご飯もたくし」

「いよいよ三人で暮らす気だと分かる。」

「まいったな」

「あ、おまわりさん」となぎさが後ろを指した。  
「え？」と振り返る。

警官の後ろにはパトカーもいた。

「ちょっと質問していいかな」

「え、ええ、何か」

「ここでこの子に何してるの」

なぎさが「パパ、かんちがいされてる」と笑った。

「パパ？ この男が」

「どういう意味ですか」と山岡は膨れた。

「はい、山岡徹、横浜からいま着いたばかりの父です、わたしは山岡なぎさで娘です、迎えに来たんです」

「ほ、これは失礼しました」と警官が車に戻りながら「大丈夫だ、行こう」と同僚に言った。

「何が大丈夫だ、失礼な」

山岡はなぎさに目で同意を求めたが、なぎさはあえて無視をして言った。

「ここ、すてきだな、子どもが安心できる」

なぎさは踏切に向かって行こうとするパトカーに、笑顔で手を振った。

山岡を招じ入れた沖田は波留美となぎさを左右に置き仁王立ちをして言い放った。「昼飯が先だ、俺の部屋に用意ができてる」と。とりあえず不愛想この上ない。

「おなががすいてると人間、気が短くなるんだって」

波留美が半ば笑って理由付けをした。

四人が中に入ったところでなぎさがいたずらっぽく言った。

「豊の上でちゃんとすわるけどいいの？ 波留美」

「どういう意味だ」と沖田が波留美をにらむ。

「脚が石爺みたいに曲がるから。美容のため」

「一二回の正座で曲がるもんか、俺のガニ股は柔道のせいだ」

コチコチに硬かった山岡まで巻き込んで皆で笑った。

松花堂弁当風だが仕出しではなく、香枝の手作りだった。

「あのおばちゃんも呼ぼうか」とまたなぎさが口ばしを入れた。

「いい案だけだね、弁当の後のこの二人の話し合いの結果次第だ。さて夕食が賑やかにやれるのかなあ」

沖田の言葉に波留美と山岡は首をすくめた。

食事は恐ろしく静かに二十分ほどで終わった。

「さて、俺となぎさはここを出てキッチンに居る。二人だけにするから相手の目を見てまっすぐに話し合いなさい。なぎさ、二人で箱を片付けるぞ」

「はい、洗うの、わたしやるから、ジイジ箱二人分持って出てね」

「すみません、お義父さん」

「謝る相手が違うと思う」と沖田は笑顔を閉じて言った。「ちなみに俺も詳しいことはまだ何も聞いていないから安心しなさい」

「わたしも知らないから」とまたまたなぎさが大人ぶった。

山岡は面食らった。一方的に自分が悪い今回の件、面と向かってネチネチ責められもせず罵倒もされない。それどころか夫婦の和解を目標にして段階的に配慮が施されている。ある種の報復ばかりを予想して

びくびくしていた自分とは次元が違った。ふと夏川の言葉を思い出した。「土下座しかないな」の一言を。「なんですぐ追いかけて来てくれなかったのよ」

波留美は心して「来なかったのよ！」は避けた。最初から許す気だったというニュアンスが必要だったからだ。

「お義父さんがちょっと怖かった、何て弁解したらいいか分からなかった」

「石爺が？ 優しいよ。だいいち謝る相手が違うじゃん」

「石爺って何」

「伊豆の硬い築城石に興味津々なんだって、石頭だからじゃないわ」

波留美の狙いに反して、これは全くうけなかった。

山岡は座布団を外して少し後ろに下がり両手をついた。

「全部僕が悪い。ごめん。戻って来てほしい、このとおり」

同僚の夏川もしたという土下座。頭を下げている間にジワジワと襲ってくる屈辱感が快感に変わるのを山岡は、不思議な感覚としてとらえていた。

「ありがと。わかったからもういいよ、これからのこと話そう、ね？」

波留美は笑顔で畳の上の土下座を心で見つめて、受け取った。

一方、キツチンテールでは沖田がなぎさにクイズを出していた。この孫と話すのが楽しいという気持ち、それが直に感じられる。緩む頬が何よりの証拠だ。

大人の男が百人以上で海辺に運んできた一メートル掛ける一メートル掛ける二メートルの重たい石を、海岸に浮かんでいる木で造った小型の、手で漕ぐような船に載せるにはどうしたらいいか。

「わたしだったらどうするかで、いいの？」

「うん、もちろん。四百年以上も前に実際にやっていたことを聞いているんじゃないよ、なぎさならどうするのかわかんないんだ」

孫の目が天井を見詰めている。その必死の構えが嬉しい。

「みんなで石をはこんできた海岸だけど、砂浜なの、それとも岩と石ばかりとか？」

なるほど答えを出すために条件を揃える気だ。沖田はワクワクしてきた。

「砂浜にしよう」

「木の船の大きさは？ その石がいくつのつかるかでいいよ」

「二個だな。なにせ手で漕いで伊豆から江戸、おっと、東京まで運ぶんだからたくさん載せられるほど船は大きくない」

実際は二個だけでは金にならないとは思ったが、大きな帆船で海運したのはだいぶ経ってからだと資料にはあった。

「みんなで持ち上げて海に入って、ヨイショとのせられないからどうするかってことだよねー。なんか書く紙は、使っちゃダメ？」

「うん、頭で考えて言葉だけで説明して」

これは勉強ではなくてゲームだ。なぜだ、どうやって、と考える遊びなのだ。正解が出たかどうかは二次的ではない。沖田はなぎさならなんとか答をひねり出すだろうと踏んだのだ。

なぎさは天井を見詰めていた目を沖田に向けた。

「船のはばの倍ぐらいのはばで砂をほって、その船をツナで引っぱって入れるようにする。で、ほったみぞのまわりに四角い石を並べて強くして、両側を平らにしたらコロコロ丸太をたくさんおくの。それからみんなでみぞの中の船の、のせたい場所まで石を押ししたり引っぱったりするのよ。あとは下におろせば

いいじゃん」

沖田は出た案を頭の中で若干補足して凶化してみた。本で知った修羅引きという運搬の発想も入って驚いた。

「いいアイデアだね。でも石を船に下ろすときに石の下にある丸太が安全に外せるかな？ 上に載ってる

石がものすごく重いんだぞ」

「あっと、ツナで一度丸太より上に石をもち上げなきゃだめだ」

もうそこまでいけば充分解決したことになる。あとは上方向への力を下方向へ換えるための強い横棒を溝の両側に設ければ足りる。

なぎさが続けて考えている。きつと詰めの解答についてだ。

この子はやっぱり面白いと沖田は笑みを浮かべて拍手をした。

そのとき戸襖が開いて山岡と波留美が和室から出てきた。

「なんか、楽しそうじゃん、二人」

「お義父さん、ありがとうございます」

「いや、俺はなんにも役に立ってないよ」と、沖田はめいっばい頬を緩めてうなずいた。

「良かったね、波留美。夜はおばちゃんも呼んでパーティだ」

そう言うてからなぎさは、勢いよく立ち上がった。

どうやら香枝の処へ知らせに走るつもりらしい。

翌朝の沖田家は賑やかだった。山岡がもう一日ゆっくりできるということで、一家揃って伊豆高原で遊ぶことになった。国道一三五号沿いの波留美のアルバイト先は事情を話すと午後四時には働いた分の賃金を手渡せるという。その間ミュージアム系の施設で楽しもうと昨夜のうちに決めたのだとか。朝食は香枝と波留美が共同で用意をしたのだが、その場で香枝が伊豆高原まで車で送ることに決まった。

沖田の家の前は道路が狭いので出掛ける際はせわしなかった。万一他家の車が来れば迷惑をかけるからだ。

「じゃ、ジイジまた今度ね」

まずはなぎさが助手席に乗り込んだ。

「香枝さんと仲良くね、元気でね」と波留美はウインクをした。

「お義父さん、ほんとにありがとうございます」

山岡は沖田の真正面に立ち四十五度の辞儀をした。

「途中気をつけて、三人仲良くして」

うかつにも沖田は目が潤んだ。きつと安堵感がそうさせるのだ。

車が動き出すと、顔を半ば出してなぎさが手を振った。

「駅に着いたら大きな石を見るんだぞ」

伊豆高原駅前に展示されている築城石のことだ。

「うん、きのうのゲームの石みたいなのやつねー」

車は小さなカーブを曲がってすぐに見えなくなった。

一人になって考えてみると何ともあつけない幕切れだった。波留美となぎさが突然玄関先に立ったとき、沖田は「上がれ」と言ったあと、小一時間ほど海の位牌がある和室に籠った。十年ぶりに見た娘と初対面の孫、何をどう考えたらいいいのか、いや何を言ったらいいいのかさえ分からなかったからだ。

キッチン椅子に座ったまま荷物も解かなかった二人。沖田は口をつぐんでうなだれている姿にうっかり涙ぐんだ。いい歳をして何を真四角になっているのかと、自身の姿勢に呆れもした。なぎさに洋間、波留美に和室を使うように言ったのは、父と娘で大人の話をする場合、一時的にせよなぎさの居場所が無くなる場合があると踏んだからだだった。

それでも言葉少なな時間は続いた。来た翌日に波留美はアルバイト先を探しに行き、簡単に見つけて帰って来た。たぶん二つの意味があったろう。会話が弾まずに息が詰まる。仕事を探しに出れば、離婚も覚悟の上で来たと父親が察してくれる。子供じみた行動だが、たしかに沖田には伝わった。

「海、お前ならどう裁く」と、波留美が朝食もとらずに出勤したあとで、仏壇の前で瞑目する日が続いた。感性豊かななぎさは母親と祖父の背中合わせの日々をどう見ていたのだろう。その回答は来てから五日目のなぎさとの会話で明らかになった。

「ジイジ、なぎさの名前、誰がつけたか知ってる？」

考えたことも無かった。海からも聞いてはいない。

「波留美だよ。パパはね、はるかかって付けようとしたんだ」

山岡はるか。国語的にはたしかになぎさよりは合う。そう思って、沖田はうつかりうなずいてしまった。

「波留美はこう言ったんだって。バアバは海、わたしは波、孫はなぎさ。ちゃんと海につながらなきゃ嫌だって」

「いくつおのときに聞いたの？ その話」

「ここに来る前の日。だから伊豆へ行こうって」

「知らなかった」

「これでもう仲良しだね」

なぎさは、心底抱きしめたくなくなるような笑顔で話を締めた。

波留美が覚悟を決めてきたのなら一緒に暮らそう。離婚するなら力になろう。伊東に行く目的もより明確になった。友人の弁護士に助言を受け、ホームセンターで家の合鍵を作るためにと。

あの日男物の傘を抱いて富戸駅で待っていてくれたなぎさは、明らかに何かを感じ取っていた。その何かのために自分に何が出来るかを考えていたのだ。それにひきかえと、沖田は自分の小ささを恥じた。

「海、お前はいいな、あの子にずっと会っていたんだから」

沖田は仏壇の海の遺影を人差し指でそっと突いた。

紺碧というのだろうか、一言では表現ができないような深い色合いだった。その海水が黒くてがっしりとした崖にぶつかって真っ白に砕け、元の色に勢いよく混ざって一時そこだけが絵の具の水色のようになる。

「高いところ苦手でしょ、わたしも同じ、掴まって進もう、ゲンさん」と香枝が後ろから沖田の肩を叩いた。

たしかに沖田は高所恐怖症ではある。高さが二十三メートル、長さが四十八メートルもある城ヶ崎海岸の門脇吊り橋はかなり揺れも大きい。若い二人ならこれ幸いと手をつないだり、腰に手を回して励まし合ったりするのに違いないが、高齢者二人ではなかなかそうはいかない。ロープに頼りつつやっとの想いで対岸に行き着いた。

「もう少し前の方で座りましょうか」と香枝が崖の先端を指差した。

「悪いが先にそのトイレに行く」と沖田は何ともムードがない。

「もしかしてちびった？」

残念ながら香枝も同様だった。

沖田にしてみれば飾り気のない会話の方が心地よい。若い者と一緒だとバカにされたくないと思い、どうしてもストレスが溜まる。格好をつけて無理をしてしまうのもそのせいだ。

山岡一家を伊豆高原駅に送った香枝は、戻って来るやいなや沖田をドライブに誘った。どちらかと言うと否応なしだった。きつと独りに戻って一抹の寂しさを感じているに違いないとの配慮だろう。沖田は感謝の気持ちで誘いを受けた。

波の音がしているのに静寂を感じる。夏の風なのに涼やかに感じる。目の前の海の広さにはため息が出る。沖田には初めての体験だった。

「子どもがいるっていいね」と岩に腰かけたままで香枝が唐突に言った。しんみりとした響きだった。

「ああ、子、孫、ひ孫と無限に自分の命が広がるしね」

「離婚、避けられて良かった」

「似た者同士だからさ、これからも出たり入ったりは続くよ」

「山岡さん、浮気性なの？」

「俺は一度も浮気とは言わなかったけど、分るんだ、香枝さんは」

「死んだ亭主に何度もやられたから。においかな、雰囲気」

「いまの若い者がよく口にする優しさって言葉の意味、俺たちのころとは意味が違うんだ」

「へーえ、気が付かなかった」

沖田はここで小さく笑って、隣に腰かけた。

「その笑いは何かな？」

「いや、こんなのはどう？ 親の生きがいを奪っちゃいけないからいくつになっても心配かけなきゃダメなんだ、お金のことも当然頼る、これって優しさだろ」

「何それ」

「カウンセリングの本に出ていた優しさの一例」

「はるみさん夫婦がそうだって言うの。それは違うわ」

たしかに少し違う。しかし山岡は年下とか後輩の女性、挫折して哀しんでいる女性に抱きつかれたら応えてしまうタイプだ。最初に波留美が連れてきたときの印象だった。そういう優しさを無慮に出してしまふ男だと。海によると、波留美との馴れ初めからしてそういうパターンだったらしい。だから反対をした。何度でも繰り返すと思ったのだ。病に近い。大きくもめたのは今回が初めてかもしれないが、きつと過去にも何回かあった。沖田はそう分析をした。

「でも今までは来られなかった」と、香枝が沖田の口が止まるのを待って言った。

「ああ、俺の反対を押し切って結婚したからね」

「なるほど、じゃあ、分かかって黙って帰したのはなぜ？」

「波留美がそういう男を捨て切れないタイプだからさ。似た者同士というのはそういう意味だよ」

香枝はジッと沖田の横顔を見詰めた。

「じゃ、これからはすぐにとんで来てくれるね、娘さん」

「ここは喜ぶところじゃないよ」

「それでも親として寄り添うわけ？」

「ああ」

「ふつうの遊びで来るなら大歓迎するわ、わたしも」

「もめて戻って来てもいいさ、それが何度でも」

「大きい人なんだね、ゲンさんて」  
「こっちに護れる力があるうちは、ということ」  
「親子だなあ」

「そうだね」と沖田は遠い目をしてうなずいた。  
「でも…」と言った切り香枝は口を閉じた。

「何だ、途中で切られると気になる」

「なぎさちゃんに影響しないかなと思って」

「もう影響してるよ、しっかりと」

沖田は香枝を見ながらまた微笑んだ。

「それこそ、ここ、微笑むとこじゃないでしょ」

「あの子が早熟といえるほど大人びたのは親二人のせいだよ。もうどっちが親なのか分からん。楽しみだね、なぎさの成長は」

「ああ、そっち。たしかに凄いわ」

「子どもをしっかりさせるにはダメな親が一番かも」

香枝は驚いた顔で二回も瞬いた。

「いまの、自慢になってない？」

「あ。そうなるかも」

なぎさがしっかりとっているのは親の波留美がダメだから、その波留美がダメなのは親の沖田がしっかりとっているからという論法だ。

二人は離れたところにいる観光客をも振り向かせる勢いで、高らかに笑った。

ひととき大きな波が岸壁に当たって砕けた。まるで老いた二人に自重をせまるかのように…。

「過ぎてみればこの十日間は何だったんだろうね」

沖田にとってはうたたねの間にみた夢のようだった。

「相手が国語の人だから言い方考えるね」

「無理するなよ、普通で頼む」

「あら、けっこう上から目線」

「いや、悪かった、ごめん」

「答えは簡単よ、もしこの十日間が無かったとしたら、そう考えればすぐに出るわ。そうじゃない？」

「いい人だね、香枝さんは…」

「え、いまごろ？」

そう言いつつ香枝は岩のお陰で浮いている両足をゆっくりと振ってうなずいた。嬉しいのだ。

「香枝さん、手を出してみて、手のひら見せて」

沖田が突然きりりとした表情になって言った。

「え？ 手相でも見るの」

沖田は胸ポケットから真新しい鍵を出して香枝の掌にのせた。

「伊東で作って来たうちの合鍵」

合鍵を作った意味がここで大きく変わったことになる。

香枝は掌を閉じもせず鍵をジッと見ていたが、小さくうなずいた。

「指輪じゃないんだ」

「あの家は波留美に遺すって言っちゃったからな」

だから香枝を相続権のある配偶者にはできない。つまり結婚は無理だよと沖田は言いたいようだ。いや、照れくさいのかもしれない。香枝は立派な家持ちの身、戸建て一軒欲しさに相続でもめるはずがないからだ。

「じゃ、自分のお葬式済んだらうちにおいでよ」

これは昼間から薄気味悪い話だ。

「鍵、ありがと」

「うん、いつでも来ていいから」

「お茶しに？」

「割烹着もあるよ、なぎさにからかわれた」

「…そうだね、わかった」

どうやら家政婦にはなれそうだ。香枝は肩をすぼめて小さく「ふふっ」と笑った。

岩の上に座っている二人がいつの間にか引っ付き、すき間を通れなくなった海の風が、やむなく老いた二人の髪の毛を梳いて後ろに去って行く。

「さてと、そろそろ行くか」

沖田は立ち上がって、そっと香枝に向かって右手を差し出した。

「鍵はかえさないよ」と香枝が微笑む。

「手を貸したいのさ、よく映画にあるだろ」

手を借りて岩から下りた香枝は言った。

「さ、石爺の家に帰ろう、一緒に」

「え？ 石爺って、ああそれ波留美から聞いたな」

まだ夏だというのに、空気は澄み切って、並んだ二人の目の前には相模の碧い海と、雲さえ寄せ付けない青い空があった。